



レース前のウォーミングアップをしながら同時に集中力を高めている。大人ですら近寄りたがたいほどの緊張感を見せていた。

夢へ向け、ただひたすら走り続ける そろそろ、階段を一つ一つかけ上がるように

痛感したシニアとの差 逆に目標が定まった

中学の後半から高校時代にかけ、ジュニア(18歳未満)では国内に敵無しの強さを誇った朱澄さん。日本カヌー連盟から将来有望な選手であると認められ、シニア(18歳以上)日本代表の強化合宿に特別枠で参加するよう招へいされた。

その頃北京オリンピックの開催を1年後に控え、それに向けた選手選考レースのまっただ中。当然、同じチームの仲間であってもライバル同士。全員がオリンピックに出場できるわけではない。参加するシニア代表選手たちの集中の度合いや練習のレベルの高さは半端ではなかったという。

「そこで『戦うこと』の厳しさを目の当たりにしました。私は特別枠という立場で参加

させてもらいましたが、日本トップレベルの選手たちと自分のレベルの差にがく然としたんです。オリンピックを指すというのはスポーツ選手にとって最大の夢。その夢を実現させようと必死で励む人たちと一緒に練習することができた。それだけで大きな刺激になりました。」

1カ月半にわたる長期合宿。初めての自炊生活も経験した。「家では家事はほとんどやめたことなくて。お母さんの手伝いくらいかな。でも自分で料理しなきゃと思つたら頑張りましたよ。栄養バランスも考え、必ず3品以上食卓に並ぶよう心がけていたんです。」

練習ではトップレベルの選手たちに全くついていけないことも、同じようにスタートしても、一こぎすることによって、一こぎするごとにどんどん離されていく。差は一向に縮まらない。ジュニア時

代、常にトップを走り続けた朱澄さんは、ここで大きな挫折を味わう。心が折れそうになるほどの屈辱だった。「くやしかったですね。でもトップとの差を痛感したこと、逆に目標がはっきりしてきた面もあるんです。北京も視野には入れていたんですが、まずは自分のレベルを高めよう、日本のトップを目指そう、オリンピックは次のロンドンを見据えよう」と。気持ちを固めました。」

大村朱澄、高校3年冬の決意だった。「ロンドンオリンピックに出場したい」。そんな決意を固めたあとに出場した、ジュニア時代の最後の世界選手権。いろんな意味でプラスになった大会だったと朱澄さんは振り返った。

「その選手権の成績自体は目標に届かずくやしさをし

ました。知らず知らずのうちに、自分自身にプレッシャーをかけていたんです。心も体も硬くなっていたのかな。ペアで出場した同じ日本チームの子たちが、本当に伸び伸びとレースをしていて……。チャレンジャーとしてのぞむ意識、姿勢みたいなものを感じたんですね。『もつと肩の力を抜いて、レースを楽しんでおいで。カヌーができる喜びを感じてきな』と言ってくれた代表コーチの言葉の意味を、その時ようやく実感することができたんです。」

カヌー漬けの日々 代表にふさわしい選手に

さまざまな理由により、大学はカヌー部のない早稲田大学を選んだ。高校までとは違う環境に身を置いた。指導者がいない、練習メニューも自

分で考える。決してベストとはいえない環境の中で、一人練習場に足を運んでは、黙々と練習に励む日々が続いた。

「高校時代から、自分で練習メニューを考えることがありましたから、それは苦になりませんでした。でも一人で練習していると、どうしてもその時点での自分のレベルが分からなくなるんですね。その頃の自分のタイムは、決して飛び抜けたものではなく、監督たちの目にとまるような成績は残せていませんでした。」

それでも大学1年の冬から日本代表の合宿に招へいされることも増え、カヌー漬けの生活を送る中で、ようやく自分のポジション、見据える先が分かってきたという。

先ごろ中国で開催されたアジア競技大会で堂々の銀・銅メダルを獲得した朱澄さん。日本女子代表の2番手として不動の地位を築きつつある。しかし日本の頂点に立つ北本忍選手(富山県体育協会)には、いまだに遠く及ばないと朱澄さんは語る。

「私は常に、北本さんの背中を追いかけてきました。今もたくさんのことを吸収させて



10月14日イランで開催されたオリンピック最終選考会で喜びの表彰台



インターハイを制覇した川根高校カヌー部のメンバーたち



小学3年生当時の朱澄さん。小さな華奢な女の子

もらっています。記録だけではなく、カヌーと向き合う姿勢、行動、生き方そのもの：全てを教わっている感じなんです。」

「選手としても、人としても日本代表にふさわしい人物になりたい。北本さんに『これからの日本女子カヌー界を引っ張っていきます』って胸を張って報告したいんです」と力強く前を見る朱澄さん。

「まずは一日でも早く、北本さんと肩を並べることが第一ですね」と、あどけない笑顔も見せた。